

〈解題〉 佛教大学図書館蔵 享保十年写三種伝戒書

齊 藤 隆 信

〔抄 録〕

本伝戒書は①『授菩薩戒儀則』（古本戒儀）、②『授菩薩戒儀』（新本戒儀）、③『円頓菩薩戒布薩式』（布薩式）の三部が一つに合冊された享保一〇（一七二五）年の写本である。①は円頓戒を相承する儀式（戒脈正伝法や授戒会）において用いられる「台本」で、鎌倉光明寺の住僧であった含牛が関西に齎したテキストの最古写本である。②も同じく伝戒儀式の「台本」ではあるが、嵯峨二尊院から発見された異系のテキストで、現在は知恩院の戒脈正伝法において用いられており、やはり現存が確認される中で

最古の写本である。そして③は江戸時代に行われていた布薩式の諸テキスト中の一系で、『瑩山和尚清規』巻上にある「菩薩戒布薩式」に倣っている。本解題ではこれら三種の伝戒書の来歴とその価値について述べる。

キーワード 『授菩薩戒儀則』（古本戒儀）、『授菩薩戒儀』（新本

戒儀）、『円頓菩薩戒布薩式』（布薩式）

はじめに

佛教大学の附属図書館（成徳常照館）には「授菩薩戒儀則 全」の外題をもつ伝戒書一冊がある。実際には異なる三部の伝戒書①『授菩薩戒儀則』、②『授菩薩戒儀』、③『円頓菩薩戒布薩式』が合冊されているので、①がそのまま外題にされていることになる。

浄土宗の授戒において用いられている『授菩薩戒儀』には二つの系統があり、天台宗で相伝されてきたテキストを宗祖法然が改訂したと言われる①『授菩薩戒儀則』と②『授菩薩戒儀』である。ふつう前者を「古本戒儀」または「黒谷古本」、後者を「新本戒儀」と称して区別することになっているので、ここでもそれにならって古本と新本と呼称する。現在、古本は増上寺（関東）、新本は知恩院（関西）の伝

戒道場と授戒会で用いられており、またこれら両テキストに関わる来歴、所在、構造、内容などについてはすでに詳しい報告もある^①。また③『円頓菩薩戒布薩式』は布薩の指南書である。大正以後の浄土宗で布薩は行われていないが、江戸の檀林では伝法然撰の『浄土布薩式』に基づいて行われていた^②。ただし本書はそれとは異なるテキストである。ここではこれら三部の来歴と価値について述べたいと思う。なお本誌に掲載した影印をあわせてご覧いただきたい。

一、書誌と奥書

〈書写年〉 享保一〇（一七二五）年写本

〈寸法〉 縦二六・〇糎×横一八・二糎

〈装丁〉 二八丁 四つ目袋綴 一紙一〇行 一行二二字

〈外題〉 授菩薩戒儀則 全

〈内題〉 ①授菩薩戒儀則

②授菩薩戒儀

③圓頓菩薩戒布薩式

〈二丁表〉

圓頓戒儀 本古

二尊院湛空上人傳

新戒儀

二尊院湛空上人所傳

圓頓菩薩戒布薩式

〈奥書〉

各々外題寫本如斯

①の奥書 なし

②の奥書

本云／弘長三年正月二日以二尊院湛空上人本／寫鎌倉極樂寺北室了／元徳二年庚午三月三日以忍性律師御本謹寫

③の奥書

弘長三年正月二日以二尊院湛空上人本／寫鎌倉極樂寺北室了／元徳二年庚午三月三日以忍性律師御本謹寫

〈本冊の奥書〉

謂第一之者古本戒儀也円頓許可之中云黒谷古本戒儀者則是也次一本者新戒儀也則二尊院湛空上人之所傳也後一本者布薩式亦是亦湛空上人所傳也則此一本者台浄兩宗通用之式目也矣此三本共享保七夏梁道玄達大圓三上人校合之者哉焉／維時享保第十乙巳星次春二月佛般涅槃日／縁嶺北溪模寫了／淳至軒

その他 朱入り、訓点あり、表紙裏に「満川所藏」丸朱印あり。②③に弘長三（一二六三）年と元徳二（一一三〇）年の奥書があり、これは二丁裏にも別筆によって転記されている。

* * *

ここに紹介する佛教大学図書館蔵本（以下佛大本と称す）は、二丁表に「各々外題寫本如斯」とあることから、書写人によって『授菩薩戒儀則』（古本戒儀）、『授菩薩戒儀』（新本戒儀）、『円頓菩薩戒布薩式』（布薩式）を外題とする三部を個別に書写して、それらをまとめ

て合冊していたことがわかる。各部の筆跡からこれらが首尾一筆であることも確認できる。個々の解説に入る前にまずは奥書を確認しておく。

②と③にはまったく同じ奥書が添えられている。

弘長三年正月二日、二尊院湛空上人本を以て鎌倉極楽寺北室にて寫し了る。

元徳二年庚午三月三日、忍性律師の御本を以て謹んで寫す。

忍性律師（一二一七～一三〇三）とは西大寺で叡尊に師事し、後に鎌倉や摂津で活躍した真言律宗の学僧で、また鎌倉極楽寺とはその忍性が開山となった由緒寺院である。忍性の極楽寺入寺は文永二（一二六五）年以後と伝えられているので、はじめの弘長三（一二六三）年に書写した人物は忍性ではないことになる。そして次の元徳二（一二三三）年もすでに没している忍性に関わるものではない。よって想像をたくましくすれば、湛空上人所伝の②新本と③布薩式とが京都から鎌倉にもたらされ、弘長三年に真言律宗の極楽寺北室において何者かに書写された。それを文永四年に入寺した忍性が転写し、その忍性書写本を元徳二年に何者かが書写したということになる。なお、これと同じ奥書は後述する林彦明の校訂本『昭和新聞訂授菩薩戒儀（十二門戒儀）』（専修道場、一九三九年、以下、林彦明（一九三九）とする）の対校本となった摂心本にも見られるので、両者は同じ系統ということになる。

つぎに本冊そのものの奥書については以下の通りである。

謂く、第一の者は古本戒儀なり。円頓許可の中、黒谷古本戒儀と云う者は則ち是なり。次の一本は新戒儀なり。則ち二尊院湛空上人の傳うる所なり。後の一本は布薩式なり。是れ亦た湛空上人の傳うる所なり。則ち此の一本は台浄兩宗通用の式目なり。此の三本は共に享保七夏、梁道・玄達・大圓の三上人校合の者なるか。

時に享保第十乙巳、星は春二月に次る佛般涅槃の日、縁嶺北溪にて模寫し了る。淳至軒

①の古本について「円頓許可の中に黒谷古本戒儀と云う者は則ち是なり」とあるのは、全誉上人が周普に与えた許可状にある「具以黒谷戒儀本古 令許可之畢」を意味する。^④②の新本は法然が正信房湛空（一一七六～一二五三）に相伝したテキストであることは周知のことであるが、^⑤③の布薩式については、版本として伝えられている法然作『浄土布薩式』二巻とは異なる別本である。これを二尊院湛空の相伝本とすることは新たな情報である。^⑥そして発見者の梁道が享保七（一七二二）年夏に玄達と大圓とともにこれら古本、新本、そして布薩式を校訂していたということも新たな情報である。その梁道（？～一七三一）とは林彦明（一九三九）の宅亮写本の跋文によると、二尊院から新本を発見した人物であり、知恩院宮門跡第三代の尊統法親王（一六九六～一七一）の教導役となり、法親王が一六歳で逝去した後に檀林小金東漸寺二一世を拜命する。義山良照の弟子でもあり妙蓮社海誓

と称した。玄達とは感蓮社洞誉上人で、幡随院第一九世、瓜連常福寺第三七世を歴任し、元文三（一七三八）年二月からは鎌倉光明寺蓮華院第六二世にも晋董した学僧で、かの関通（一六九六―一七七〇）が一六歳の正徳元（一七一）年に入室している。そして大圓とは紅蓮社敬阿央誉上人であり、十八檀林の勝願寺第二六世にして、元文二（一七三七）年に逝去している。当時はそれぞれの檀林において僧侶養成を行っていたことから、おそらくは統一的なテキストを作成すべく三人の学僧が参集して校讎作業を行ったのであろう。

また奥書の「北溪」とは、常誉撰門（一七八二―一八三九）の『檀林縁山志』巻七と巻八の「学寮席規」によると、増上寺の三谷（北谷、南谷、山下谷）の一つで、北谷（北溪）はさらに神明谷、三島谷、三島中谷に分かれていた。この三谷には修学のための学寮が置かれており、佛大本が書写された享保年間には三谷であわせて一五〇棟を超える学寮が置かれ、三千人を超える年若い寮生が寄宿していた。そして「淳至軒」についてであるが、前出の『檀林縁山志』巻七には増上寺の学寮を以下のごとく記している（『浄全』一九・三八二下）。

我縁山には開山上人は是を定規し、音普公の時、再び備足し法問あり。爾来相繼て諸国の緇徒倚寓せり。中興国師の代に至りては、宗徒悉く輻輳し、他の檀林と合数すへし。慶長寛永に日を迫て盛隆し、既に承応の山記に百二十余宇とあり。或は大或は小、疆界を定め、門戸を別ち、主僧の名を標札して、別に寮名をたてず。これ智豊の寮などに異にして、曹洞の則に準せるにいたり。

増上寺山内の学寮は特定の寮名をもたなかったようである。しかしながら「軒」とは庵や房などとともに規模の小さな寺院に付す寺号の一つであると考えられるので、「淳至軒」とはおそらく北谷に布置されていた一学寮の通称であった可能性がある。『檀林縁山志』巻八は増上寺の学寮における師資相承、弘法伝授の系譜を明らかにする法系伝由の巻次であり、そこには（『浄全』一九・四一四上）、

見聞の寮中に近世の記伝あるを抜出し、其二三をのするは今時の詳をまつにあらず。当来末徒に実系を伝んか為なり。

とあつて、撰門にしても一五〇棟を超えるすべての学寮を把握していたわけではなかったようだが、この記述の後に「蒼龍窟」以下、「〇〇窟」（九寮）、「〇〇室」（九寮）、「〇〇楼」（一寮）、「〇〇亭」（二寮）、「〇〇庵」（一寮）、「〇〇軒」（一寮）の合計二三寮の学寮の名称とその相承系譜が列記されている。その中に三谷のうち南谷の学寮として「旭松軒」の名が見える（『浄全』一九・四四一下）。

旭松軒 南中谷南東隅

一説に衍誉大僧正、はしめ新谷の旭松室を持給ひ、故あつて此地にうつらせられしかば、古名を残し名けられしとぞ。当主周道。

最盛期には一五〇を数えたという学寮のうち、『檀林縁山志』に紹介されているものは二三寮でしかないが、その中に「軒」を寮名に付す

ものが右のように一例含まれていることから推測して、やはり佛大本奥書の「淳至軒」は北谷にあった学寮の通称であつたとみなしてよからう。

書写した人物について特定することはできないが、淳至軒に掛錫して行と学に励んでいた一学徒の手によるものであろう。能筆ではないものの最後まで筆跡の乱れもなく丁寧に写されている字姿から、その真摯な態度がうかがえる。

二、『授菩薩戒儀則』（古本）

古本については林彦明（一九三九）では、応永一六（一四〇九）年に明誓智に授けた現存最古の写本である茨城県瓜連常福寺所蔵の七祖聖岡親筆本を底本に、他の六本を校本としている。この古本は主に増上寺をはじめとする関東での授戒に用いられてきた。その内容は天台の湛然本を抄撮しながらも、そこに最澄の『授菩薩戒儀』から第三請師の文を、安然の『普通授菩薩戒儀広釈』から性徳・伝授・発得の三種戒を、そして新羅太賢の『梵網經古迹記』から第十説相の十重禁戒の名称をそれぞれ取りこんでいる。ただ古本には聖岡以前の写本もなく、浄土宗三代の著作中にもその存在を示唆する文言は見当たらないことから、これを法然の撰述とすることに疑義がもたれている。⁹⁾

佛大本は林彦明（一九三九）が校本として用いた延享元（一七四四）年に写された鎌倉光明寺所蔵含牛本と同系であることが確認できた。ただし独自の用字もあつて、完全に光明寺所蔵本と一致するわけ

ではない。光明寺所蔵本の奥書には以下のようにある。

先師大僧正湛譽和尚、貫主縁山時、二品法親王尊統和尚、豫請傳法也。則先師屬洛東義山師、旁索傳法遺失書。義山師索得古本戒儀及庭儀傳法軌則各一軸。蓋秀譽含牛和尚所奉持云。乃俾梁道上人皆寫之、遙以爲賜、此書實是也。先師終有賜不肖、何其多幸。因題其後、傳之未聞矣。／維時延享改元甲子十一月廿九日／寓縁山南溪貞鏡誌

最後にある「南溪貞鏡」の南溪（南谷）とは先述したように、増上寺の三谷の一つである。その住僧である貞鏡とは、後に東漸寺第二八世となる光蓮社明誓貞鏡である。¹⁰⁾その貞鏡にとつて先師大僧正湛譽和尚とは然蓮社湛誓門周（一六四八～一七二〇）であつて、撰門の『檀林縁山志』一〇（『浄全』一九・四九五下）によると、門周が増上寺第三五世の法灯を継いだのは宝永元（一七〇四）年のこと、その在任中に起こつた六度の出火によつて正徳元（一七一一）年に引責退隠している。

含牛については大玄『円戒啓蒙』「含炭上人伝書ノ事」と同『円布顕正記』巻上「含炭上人大変ノ章」¹¹⁾、了吟『浄土布薩戒授法目録考』「秀譽之事」¹²⁾や、『略伝集』「含牛上人伝」¹³⁾に掲載されているが、右の奥書の記載内容と『円戒啓蒙』の内容が一致することは注目できる。それは『円戒啓蒙』の撰者大玄（一六八〇～一七五六、増上寺第四五世）が京都において義山良照（一六四八～一七一七）から直接聞き及

び¹⁴、また貞鏡からも伝聞していたからである。ここでは以上の諸資料によつて事の顛末を確認すると以下のようになる。

秀誓含牛（含炭とも称す。？）一六三〇）は鎌倉光明寺の伴頭であり山主の候補者であつたが、先代が世を去り含牛が次の山主に推挙されようとするころ、鷹狩（または鶴岡八幡宮への参拝）のため鎌倉を訪れた將軍家康が光明寺の近くまで来た際、含牛と不仲であつた塔中の僧に本寺は無住である旨の報告を受けたため、將軍は立ち寄ることなく素通りする。これを知つた含牛は激昂して本山光明寺の伝書を不法に帶出し上京してしまつた。京都では大宮高辻の西往寺を創建し、

自らの像を造りその胎内に持参した伝書を封入して、以後これを開くものには天罰が下ると誓つた。含牛の没後、黒谷三二世順超の命を受けた弟子の順波上人が伝書を取り出そうとするが、木像は怒つて順波を投げとばし骨髓砕け体中に腫物ができて数か月で絶命してからはこれを開けようとする者はいなくなつた。義山は事の由来を憚り、詳細を大玄に語ることはなかつたようであるが、大玄は後に貞鏡から以下のことを仄聞したという。それによると、知恩院の尊統法親王が下向して増上寺主の湛誓門周に謁見したおり法親王が受戒を願ひ出た。しかし含牛事件によつて関東には『授菩薩戒儀』が失われていたため、梁道を使者として上京させ、義山に『授菩薩戒儀』を含む伝書を探索するように頼んだのである。そこで義山は七日の沐浴と別行によつて西往寺の含牛像に礼拝祈願して含牛の願掛けを解いてこれを無事に開け、含牛が鎌倉光明寺から持ちだした伝書（古本戒儀・五重伝法軌則・庭儀の三軸）をその胎内から取り出し、これを梁道に書写させ、

もとの伝書は再び含牛像の胎内に納め¹⁵、写したテキストは貞玄を通じて関東の門周のもとに届け、門周はその存命中に貞鏡に相伝し、貞鏡は宝暦二（一七五二）年二月二五日をもつて、もとの鎌倉光明寺にこれを納めたという。この百数十年ぶりに光明寺の宝蔵に復した写本こそが、林彦明（一九三九）が対校本とした延享元（一七四四）年の含牛系古本なのである。したがつて享保一〇（一七二五）年の佛大本は含牛系古本の中で最古の写本ということになる。

佛大本の古本戒儀がどのような経路で増上寺の学寮淳至軒において新本戒儀とともに書写されるに至つたのかは不明であるが、宝永年間（一七〇四～一七一）に義山によつて西往寺の含牛像胎内から取り出され、それを書写したのが梁道であつた。また尊統法親王の門跡在任中に二尊院の宝蔵から新本を公にした者も同じく梁道である。その双方に関与していた梁道によつて、貞玄を通して増上寺第三五世門周のもとに届けられたか、あるいは尊統法親王の没後に関東に下向した梁道みずからがもたらしたことで、増上寺ではこれら「いわくつき」の古本（鎌倉光明寺旧蔵の含牛帶出本）と新本（五百年の秘伝書）とが話題となり、早々に学寮での修学のテキストとされていった。それが佛大本だったものと考えられるのである。

三、『授菩薩戒儀』（新本）

新本とは、法然が嵯峨二尊院において改作し、それを弟子の湛空に相伝したテキストとされ、以後二尊院の宝庫に秘書として珍藏されて

きたもので、しばしば出庫を求めた者もいたが、その裁可が下ることはなかった。それを知恩院宮門跡第三代の尊統法親王の教導役となっていた梁道が法親王に要請し、法親王はさらに養父の靈元上皇より許可を得ることになったという。こうして梁道は勅を得たことで法親王の門跡在任中（一七〇七―一七一）に宝庫を開けて約五〇〇年ぶりに世に出た戒儀であると言われている。この新本を発見した経緯については林彦明（一九三九）で底本にされた宅亮書写の明和五（一七六八）年本の新本の跋文や、安永八（一七七九）年に素信によって編纂された以八（一五三二―一六一四）の伝記『光明院開基以八上人行状記』（『浄全』一七・七七六下）にも記録されている。

江戸中期までは檀林において古本にもとづく伝戒儀式を行っていたとされるが、新本の発見以後はこれを用いて戒を伝授するようになったとも言われている。しかしながら、増上寺第四世大玄の『円戒啓蒙』には（『続浄全』一一・二五九下）、

然ルニ今古本戒儀ヲ用ルコトハ、庭儀直牒許可何レモ古本ヲ取り、又問師御自筆ヲ以テ書寫シ、瓜連ニ藏シ給フモ古本ナルガ故ナリ。
（中略）今問師ニ従フガ故ニ古本ヲ用ルナリ。

とあるように古本が用いられていたことを述べている。また『古本戒儀授法記』なる著作もあること、さらに義柳の『浄土戒学織路』にも「予ハ専ラ此古本戒儀ヲ以テ、結縁相承ノ円戒ヲ弘通スルナリ」（『続浄全』一二・三三九上）と記されていることから、新本が発見された

以後であつても、檀林ではやはり聖岡から相伝されてきた「御自筆」の古本の權威はすこぶる高かったようである。

さて、百万遍知恩寺第六九世法主の林彦明大僧正（一九六八―一九四五）は、梁道が発見し書写した二尊院所蔵の原本を実見しようと試みているが、すでに散逸しており実物を確認することができなかった¹⁶という。昭和十四（一九三九）年、林は新本の底本と校本を以下のよう¹⁶に定めて『昭和訂授菩薩戒儀（十二門戒儀）』を発刊している。

底本 明和五年（一七六八）信阿寂宅亮書写本（専修道場旧蔵）

皆明和五年戊子冬十一月廿二鳥是日老師大祥忌也

小弟 安蓮社朗誉信阿寂宅亮謹識

校本 ①安永二年（一七七三）恵海書写（東京心法寺蔵）

右此巻者、安永二年五月頃、三縁山於蒙光庵書写畢。一

切人ニ伝事、堅無用也。恵海

②享和二年（一八〇二）了誠書写（鈴木靈真蔵）

新本授菩薩戒儀 湛空受之

享和二戌年初夏、以法雨和上本写。了誠敬書

③文政六年（一八二三）摂心書写（専修道場旧蔵）

弘長三年正月二日以二尊院湛空上人本 写鎌倉極楽寺北

室了

元徳二年庚午三月三日以忍性律師御本謹写

右新戒儀則、円光大師之作、依妙楽十二門戒儀而改作之、授湛空上人也。対古本云新戒儀矣。文政六未九月、以信

岡師本校合畢。 撰・心識之

④年代不明 『統浄土宗全書』所収本（底本不明）

底本と校本③の二種は、林が上首（道場長）となっていた総本山専修道場⁷の写本である。残念なことに昭和二〇年七月の沼津空襲によって林の自坊は灰燼に帰し、同年九月には林も逝去し、専修道場にしても閉鎖を余儀なくされ、戦後の混乱によってこれら二種の写本はその行方を絶ったまま現在にいたっている。したがって現在この新本を用いるということは、林（一九三九）や、更にその校訂記を削除して復刻された『浄土宗聖典』巻五所収本（浄土宗、平成一〇年）といった最近の資料に頼っているというのが実状である。佛大本の新本は林（一九三九）で底本とされた明和五年（一七六八）の宅亮本よりもはるかに古く、現存する新本の写本では最古ということになる。また③の撰心本と同じく「弘長三年…」、「元徳二年…」の奥書があることからこれと同系写本であり、本文も概ね一致するが、中にはこれと異なり、むしろ①恵海本や②了誠海本と一致するところもある。また林が蒐集した五本（底本と四種の校本）のいずれにも一致しない校異も存在する。その原因として考えられることは、前述した奥書にあるごとく檀林における僧侶養成に資すべく、三人の学僧が参集して校合したからであろう。いま佛大本との校異を整理すると以下ようになる。（宅亮本↓宅 恵海本↓恵 了誠本↓了 撰心本↓撰 統浄全本↓統 佛大本↓佛）

◇第二三帰

「更不帰邪魔外道」（宅）↓「餘邪魔」（恵・了・撰・統・佛）
「唯願三宝慈悲摂受」^{受者随語}（宅）↓「受者随語」なし
（恵・撰・統・佛）

◇第三請師

「須専重一心恭陳三請」（宅・了）↓「秉」（恵・撰・統・佛）
「大徳於我不憚劳苦」（恵・了・撰・佛）↓「苦」+「随語」
（宅）、「苦」+「慈悲愍故」（統）
「一心奉請釈迦如来」（宅）↓「釈迦牟尼」（恵・了・撰・統・佛）

「施与某甲等菩薩淨戒」^{三説}（宅・了・統）↓「」（恵・撰・佛）

◇第四請師

「從無始来至於今日」（宅・恵・了・撰・統）↓「已来」（佛）

◇第五発心

「無上菩提誓願成」^{受者随語}（宅・恵・了・撰・統）↓「受者随語」なし（佛）

◇第七授戒

「求受一切菩薩学処」（宅・恵・了・撰・統）↓「所」（佛）

◇第八証明

「南瞻部州大日本国」（宅・恵・了・撰・統）↓「洲」（佛）

◇第九現相

「彼菩薩咸生歓喜」（宅・恵・了・撰・統）↓「彼之菩薩」

(佛)

◇第十説相

「若醕諸酒」(宅・恵・了・撰・続) ↓ 「沽」(佛)

◇第十二勸持

「悉須以願而加護之」(宅・恵・了・続) ↓ 「持」(撰・佛)

また添え仮名を反映させた『浄土宗聖典』本の訓読文と佛大本の相違を指摘するならば、第一開導のはじめにある以下の文をあげることができよう。

「然るに戒に多種有り。五・八・十・具は菩薩の律儀なり」(宅)

「然るに戒に多種有り。五・八・十・具・菩薩律儀なり」(佛)

『浄土宗聖典』では宅亮本の添え仮名に準じて「具は」と訓読されているので、五戒・八戒・十戒・具足戒のすべてが菩薩の律儀という訓みである。一方の佛大本は並列で訓んでいる。ちなみに新本は湛然本の略本なので、そちらを確認するとやはり「然るに戒に多種有り。五・八・十・具と菩薩の律儀なり」(『浄土宗聖典』五〇八頁)と並列で理解している。「然るに戒に多種有り」という冠句があるので、ここは佛大本に従って並列で訓むべきである。¹⁸⁾

ついでながら『浄土宗聖典』本の誤植等を以下にあげておく。

◇第二三帰と第十一広願に「従今已往」を「今より已往」とルビを付しているが、「已往」には以前と以後の両義があるので、ここは「今

より已^{のち}往」としなければ通らない。なお訓読文の「住」は「往」の誤植である。

◇第六問遮の七遮をすべて「さざりしや否や」とするが、原文は「否」ではなくすべて「不」である。第七授戒と第十説相にある「能く持つや否や」も同様。

◇第七授戒の「第三の羯磨すでに畢んぬ」の「畢」は「竟」となっている。

二尊院で秘書とされていた新本を公にした正確な年時については不明であるが、尊統法親王の門跡在任中(二七〇七〜一七一)であることは確実であり、そうすると佛大本の書写年である享保一〇(一七二五)年は発見されてから二〇年を経てもおらず、発見者である梁道の存命中ということでもあり、しかも林(一九三九)が底本とした宅亮書写本(一七六八年、現在は所在不明)よりも四三年も古い写本ということになる。まず何よりも現存最古の新本の写本であることにこそ、佛大本の最大の価値があると言わなければならない。おそらくは、今後これを遡る新本のテキストが世に出現する可能性はきわめて低いと思われる。

* * *

左は四種の『授菩薩戒儀』における十二門それぞれの文字数を対照した表である。湛然本、古本、新本の文字数は林(一九三九)による。慈胤本は粟田青蓮院所蔵の正嘉二(一二五八)年写本(林彦明(一九四一)による。なお、本文の字数のみを示し、割注は字数から除外

《四種『授菩薩戒儀』各門の文字数》

	湛然本	慈胤本	古 本	新 本
1.開導	361	86	235	163
2.三帰	90	127	138	81
3.請師	290	196	231	480
4.懺悔	971	91	120	206
5.発心	265	62	65	74
6.問遮	266	72	61	74
7.授戒	338	812	931	355
8.証明	95	47	48	69
9.現相	220	122	185	153
10.説相	394	393	155	643
11.広願	324	63	77	212
12.勸持	111	40	41	67
合 計	3,725	2,111	2,287	2,577

している。

四、『円頓菩薩戒布薩式』（布薩式）

佛大本の最後に収録されているのは『円頓菩薩戒布薩式』である。浄土宗では江戸時代に布薩式による伝法が行われており、それは法然によって撰述されたと伝えられる『浄土布薩式』二巻（具名は『浄土宗頓教一乗円実大戒布薩法式』）を根拠としていた。¹⁹これは法然が摂津の勝尾寺で成書して聖光に相伝し、その後も良忠、良暁へと秘密裏に伝えられていった奥義書であると言われてきたが、²⁰実際には室町中期ごろに世に現れ、法然に仮託された偽書である。伝戒の儀式は巻上に示され、巻下には持戒功德として事頓と理頓の戒体について、とくに念仏との関係や、念仏者と十重禁戒について説き、それらが雑行で

はないことを論じている。

天台の円戒は『妙法蓮華経』に示される菩薩の精神を範とする戒法であるので、浄土宗は浄土三部経に立脚した戒法を用いるべしとの判断から、それを反映した『浄土布薩式』による相伝は江戸時代には重要な伝法となった。十六科段の作法に準じて行なうが、実のところ『授菩薩戒儀』の十二門とは開合の異なりでしかない。その布薩推進派には輪超（？）一六七八、岸了（二六四七）一七一六、了吟（一七二八）一八〇二などがおり、輪超の『布薩式弁正返破論』では円頓戒を自力聖道の受戒、布薩戒を往生浄土の受戒であるとする（『統浄全』一三・四五六）。しかし室町時代の西山の相巖がこれを妄伝であるとし、江戸中期になると忍激が法然撰述に疑義を呈している。布薩の反対派は忍激、敬首、要信、大玄、そして福田行誠がその先鋒を担った。

とくに増上寺第四五世の大玄は『円布頓正記並余説』を著わして、その巻上「第十三 布薩戒二間違アルノ章」において、そもそも布薩戒は法然、聖光、良忠、聖問の著作中には一言隻句として触れられていないこと、布薩戒と称する戒法は経論中にその用例を搜索しえないことなどを指摘しながら、その誤謬なること七ヶ条を示している（『統浄全』一三・五二二上）。また『布薩戒講義』（『統浄全』一三・四九六下）や『円布頓正記』（『統浄全』一三・五一一）、『円戒啓蒙』（『統浄全』一一・二七八）においても、元和の『浄土宗法度』には布薩に関して何も述べられていないので、おそらく含牛（？）一六三〇）が鎌倉光明寺から伝書を持ち去った後に導入されたのであらうと

述べている。その含牛事件については前述のとおりである。そして、明治二〇年には福田行誠（一八〇六―一八八八）が『新伝語』を著して布薩の廃止につとめ、明治四五年、伝通院における布薩を最後に、ついに宗門の賛同を得てこの相伝を廃止するにいたった。

佛大本の『円頓菩薩戒布薩式』は他に同系のテキストを見ない。²¹二丁表の目録に相当する部分に「二尊院湛空上人所伝／円頓菩薩戒布薩式」とあることや、奥書においても「後一本者、布薩式也。是亦湛空上人所傳也」とあるように、新本とともに二尊院湛空上人所伝本であるとするのは、聖光に相伝された『浄土布薩式』とは異なる相伝書であること示唆しているようにも思われる。つまり『授菩薩戒儀則』（古本）と『浄土布薩式』は法然―聖光―良忠という鎮西相伝であるが、『授菩薩戒儀』（新本）とこの『円頓菩薩戒布薩式』は法然―信空―湛空という別系の脈譜が伝えられてきたことを宣揚しているがごとき印象を受ける。

さて、浄土宗に布薩が導入された経緯について、大玄『円戒顕正記』巻上（『統浄全』一三・五一―二上）には以下のように伝えている。含牛事件の後、光明寺から発見された二種什物である朱切紙と御判物のうち、朱切紙には「時年高倉院の時（一一六八―一一八〇）、円頓妙戒を聞きて一向専修戒門を勧進す。乃至、観音入滅し弥陀成道、乃至、十方仏土中に唯だ往生の法あり。他力実体、乃至、良忠判、云云」とあり、御判物には「浄土布薩一乗戒、寂慧房に授く、乃至、良忠判、云云」とあったという。これらはいずれも良忠の真筆であることを根拠として布薩戒の伝授が始められる。関東では含牛によつて

正統な円頓戒の相伝が不可能になったことにより、新たな伝法を草案しなければならなかったようである。²²

それでは、佛大本の『円頓菩薩戒布薩式』について述べよう。前述したとおりこの書名は寡聞ながら他に現存を知らない。おそらくは当時さまざまな布薩式が行われていたのであり、佛大本はそれらの一系統であつたものと推察される。その科段は伝法然作の『浄土布薩式』に基づく十六大科（①集衆 ②和合 ③洒水 ④焼香 ⑤発願 ⑥発心 ⑦問遮 ⑧懺悔 ⑨入壇 ⑩請師 ⑪受戒 ⑫証明 ⑬現瑞 ⑭説相 ⑮回向 ⑯勸持）に準じていない。²³そこで佛大本と同じような布薩作法はないものかと調査すると、道宣の『四分律刪繁補闕行事鈔』巻上にある説戒正儀篇に準拠しながらも、とりわけ総持寺の開山瑩山紹理（一二六四―一三二五）の『瑩山和尚清規』巻上にある「菩薩戒布薩式」の次第と内容が概ね合致していることがわかった。²⁴ただし、禪宗の布薩を浄土宗に転用するのであるから、『瑩山和尚清規』の「此時和尚説戒」（『大正藏經』八二・四三三上）とある説戒の部分、佛大本では高麗版の『梵網經』だけに付されている『梵網經菩薩戒序』（『大正藏經』二四・一〇〇三上中）を表白とし、十重四十八輕戒の誦説、そして巻末の偈頌をそのまま引用している。部分的には『瑩山和尚清規』の布薩手順と前後するところもあるが概ね対応しており、さらに鑑真とともに来朝した法進の『東大寺授戒方軌』に示される「大乘布薩作法」（『大正藏經』七四・二四下）や『摩訶僧祇律大比丘戒本』（『大正藏經』二二・五四九上、五五六上）、そして明曠の『天台菩薩戒疏』下（『大正藏經』四〇・五九七上中）からも部分

的に取材していることも興味深い。佛大本の三部の中では特に朱書きが多いことからしても、当時の浄土宗ではこの作法に準じて行われる布薩もあつて、関心が高かったことが窺い知られる。

おわりに

ここに紹介した三部合冊の写本はどれも稀覯書に属す。はじめの①『授菩薩戒儀則』（古本）は含牛系では最古であり、次の②『授菩薩戒儀』（新本）も現存最古の写本であることがわかった。そして③『円頓菩薩戒布薩式』は『瑩山和尚清規』に導かれた布薩法の一つとして今後も調査しなければならないテキストである。ただし、これら三部における白眉はやはり新本である。林彦明（一九三九）が新本の校訂テキストに用いた底本は古知谷阿弥陀寺の住僧宅亮所持本であった。²⁵その跋文によると、宅亮は師僧万貞（？一七六六）よりしばしば梁道の偉勲を伝聞していたという。彼は万貞が逝去するに際し、仏舍利・榜印・袈裟・新本手沢書を拝受しており、このうち前二件は尊統法親王が梁道に下賜し、さらに万貞に授けられたものであり、後の二件は梁道が万貞に親しく授けたものである。その新本は「手沢書」とあるので、これを事実とするならば梁道が二尊院で発見し書写したテキストそのものということになるので、たとえ明和五（一七六八）年の写本ではあつても宅亮所持本は来歴が確かな善本ということになる。しかしながら、佛大本の新本はそれよりもさらに四三年古く、発見者の梁道がまだ存命中の写本であつて、いわば「鮮度」がちがう。

西往寺の含牛系古本と二尊院の湛空系新本がほぼ同時期に世に現れたが、その双方に深く関与したのが梁道であつた。本書は尊統法親王が崩じた後、その教導役の任を解かれて下向したことで江戸の檀林にも伝えられた逸品なのである。

拙文を成すにあたって佛敎大学附属図書館より影印掲載の許可を得るとともに、古川千佳専門員より種々ご指教を頂戴した。記してお礼を申し上げる。

〔注〕

- (1) 林彦明『昭和新聞訂授菩薩戒儀（十二門戒儀）』（専修道場、一九三九年）、同「授菩薩戒儀」（『専修学報』九、一九四一年）、恵谷隆戒「円戒叢書解説」『浄土宗全書』統一二巻（山喜房仏書林、一九七二年）、同「改訂増補 円頓戒概説」（大東出版社、一九七四年）、坪井俊映「浄土宗の戒儀における『黒谷古本戒儀』と『新本戒儀』について」（『仏敎の歴史と思想』大蔵出版、一九八五年）、宮林昭彦「授菩薩戒儀」解題『浄土宗聖典』五巻（浄土宗、一九九八年）
- (2) 浄土宗の布薩に関する報告は寡少であるが、井川定慶「浄土布薩式の検討」（『佛敎大学研究紀要』三八、一九六〇年）、服部英淳「浄土布薩戒と日課法則」（『宗教文化の諸相』、一九八四年）、三田全信「改訂増補 浄土宗史の諸研究」伝法篇「浄土布薩の戒」（山喜房仏書林、一九五九年）などがある。
- (3) 慧堅撰『律苑僧宝』一三の靈鷲山極樂寺忍性菩薩伝に「文永二年行具支灌頂、武州刺史長時平公檀越、請開山極樂律寺」（『大日本仏敎全書』一〇五・二六八下）とある。
- (4) 林彦明（一九三九）六七頁、七五頁。
- (5) 林彦明（一九三九）四〇頁の宅亮の奥書より。

- (6) 『金剛宝戒章』の第七授戒には相伝戒として「三相伝戒、謂釈迦如来伝千仏已証金剛宝……惠思授天台法空大師……叡空授源空上人、源空授湛空上人。乃至隨時可書入人名也」(『昭法全』一〇二三頁)とあるので、それが湛空相伝とされて伝承されてきているが、布薩式は一説には建暦元年聖光に相伝されたと言われる。佛大本が湛空相伝であるということは、法然、信空、湛空と次第する相承譜脈の正統性を宣揚しようとしたのではなからうか。
- (7) 『浄全』一九・三八一〜四四七。なお、『大本山 増上寺史』本文編(大本山増上寺、一九九九年)の「七、学寮と修学方法」も参照のこと。
- (8) 『檀林縁山志』八に「享保のはしめまでは学寮の数も百五十字に近し。そのうち、諸谷ともに一二つを合せければ寮数減少あり」(『浄全』一九・四三二下)とある。
- (9) 坪井俊映(一九八五年)
- (10) 『小金東漸寺志』(『浄全』二〇・六二下)
- (11) 『統浄全』一二・二七八、『統浄全』一三・五一上
- (12) 『統浄全』一三・一五六上
- (13) 『浄全』一八・四四九上
- (14) 『円戒啓蒙』に「予(大玄)、曾テ洛陽遊学ノ時、義山上人ニ謁ス。山師予ニ語テ云ク……」(『統浄全』一二・二七八下)とある。
- (15) 三田全信『改訂増補 浄土宗史の諸研究』(山喜房仏書林、一九五九年)伝法篇の浄土布薩の戒には「現今西往寺には蔵されていない」(注記四四、同書四八三頁)とある。
- (16) 林彦明(一九三九)七〇頁、同「授菩薩戒儀」(『専修学報』九、一九四一年)によると、新本を実見することはできなかったが、二尊院には西山系の『授菩薩戒儀』が伝存していたという。
- (17) 専修道場は知恩院塔中福寿院の中に併設されていた浄土宗侶養成機関である。専修道場の上首(道場長)には土川善澈(第一代)や林彦明(第二代)が任命され、首座(教授)には石橋誠道、小西存祐、望月信亨、岸信宏、塚本善隆、恵谷隆戒、岸寛勇らがいた。機関誌として

『専修学報』全一二冊(昭和八年〜一九九年)を刊行。その専修道場も敗戦前に活動を停止し、後に福寿院も廃寺となった。その跡地は現在の華頂短期大学である。

- (18) 『梵網經』卷下に説かれる四十八輕戒の第八においては小乗戒を否定しているが(『大正藏經』二四・一〇〇五下)、その一方で『妙法蓮華經』卷四の五百弟子受記品第に「内に菩薩の行を秘め、外に是れ声聞を現す」(『大正藏經』九・二八上)とあり、智顗は『法華玄義』三下の末尾に「三帰五戒十善二百五十はみな摩訶衍なり」(『大正藏經』三・七一八上)と述べているように、要するに大乘(菩薩)の精神によって具足戒を持つという認識に立つならば宅亮本のように訓めなくもない。

- (19) 『統浄全』一三・七四上、『昭法全』一〇五八頁
- (20) 法然が『浄土布薩式』を聖光に伝授したことは『顕浄土伝戒論』に「自製金剛宝戒章二卷、並浄土布薩式一卷、浅略戒一卷……現在付属聖光上人」(『浄全』一五・八九六上)とあり、また『浄土布薩式』下には勝尾寺において七人の弟子に授与したことも伝えているが(『統浄全』一三・一〇六上)、これについて江戸の岸了(一六四七〜一七一六)は『浄土布薩戒便蒙』(『統浄全』一三・二七三上)において、浄土宗において布薩は相承されてきたが、聖光への相伝に疑義を呈している。「問ふ、聖光の伝戒は聊か信用し難し。彼の顕授の時は鎮西に在るが故に。況や密受の儀、未だその文を見ず」とある。そして、相伝の七人を「信空・湛空・貞慶・聖寛・聖光・隆寛・勢観」(『統浄全』一三・二七五上)とする説を否定し、七人の中に聖光は含まれておらず、したがって聖光へは顕伝ではなく密伝があったとする。同じく大玄の『布薩戒講義』下においても九州下向後の聖光に授与できる道理はないと退けている(『統浄全』一三・四八八下〜四九九上)。
- (21) 道光撰『聖光上人伝』に注記した信問は、本書は世に秘されてきた伝書で、聖光が良忠に相伝したテキストであろうと述べている(『浄全』一七・三九二上)。なお、鈴木靈真『浄宗伝書類聚目録』(浄土宗教学院、一九五二年)にはこの書題を確認できない。

(22) 大玄は『布薩戒講義』（『統浄全』一三・四九六下）や『円布顕正記』

（『統浄全』一三・五一上）、『円戒啓蒙』（『統浄全』一二・二七八下）において、元和の『浄土宗法度』三五条において布薩戒については触れていないことから、おそらく含牛上人が鎌倉光明寺から伝書を持ち去った後に導入されたのであらうと述べている。

(23) 伝法然の『浄土布薩式』と近似する文言として、その第五発願の内容が佛大本にも見られるが、むしろ明曠『天台菩薩戒疏』下（四〇・五九七上中）や法進『東大寺授戒方軌』（『大正藏經』七四・二五中）に
より近い。

(24) 『瑩山和尚清規』「菩薩戒布薩式」（『大正藏經』八二・四三一中～四三三中）の本源は、道宣『四分律刪繁補闕行事鈔』卷上之四の説戒正儀篇第十（『大正藏經』四〇・三四中～三八上）の布薩法にあるが、佛大本は『瑩山和尚清規』に準じた構成となっている。

(25) 『彈誓上人絵詞伝』の明和四（二七六七）年の跋文より（『浄全』一七・七〇一下）

（さいとう たかのぶ 仏教学科）

二〇一三年十月二十一日受理